

芦屋大学論叢 第79号  
(令和5年7月29日)抜刷

《研究ノート》

日本の大学生を対象とした読書教育に関する文献レビュー

—読書習慣形成に対する効果に焦点を当てて—

林 徳 治  
片 桐 由美子



## 《研究ノート》

### 日本の大学生を対象とした読書教育に関する文献レビュー

— 読書習慣形成に対する効果に焦点を当てて —

林 徳 治 (1)

片 桐 由美子 (2)

(1) 芦屋大学経営教育学部客員教授

(2) 甲子園大学図書館

#### 1. はじめに

近年わが国では、読書をしない大学生が年々増加していると言われている。たとえば、吉田昭子 (2018) は、大学生の読書量の変化を 1964 年から概観し、大学生の読書離れが進行していると述べている。また、浜島幸司 (2019) は、2013 年度から 2017 年度までの「学生生活実態調査」のデータを分析し、読書習慣がない大学生が 2014 年度を境に増加していることを明らかにしている。

それでは大学生の読書習慣について考察してみよう。平山祐一郎 (2003) は、首都圏の女子大学生 224 名を対象に、読書に関する考え方、読書行動、読書習慣を調査し、大学入学以前の読書経験が大学生の読書習慣形成に強い影響を与えていると述べている。また、澤崎宏一 (2012) は、大学生の読書習慣と文章理解力の関係性を調査し、大学生の読書習慣は高校時代の読書習慣との関係性が強く、さらに、高校時代の読書習慣には、小学校・中学校の読書習慣が関係していることから、大学生の読書習慣は小学校から徐々に形成されると結論づけている。以上から、大学生が読書習慣を身につけるには、小学校から高等学校までの読書教育が重要かつ不可欠であり、長期的な計画を立てて読書教育を行っていく必要があるといえよう。

では、大学入学の時点で、すでに大学生の読書習慣形成は完了しており、大学入学以後に読書習慣が大きく変化することはないのだろうか。上述した平山論文では、「読書の大切さや重要性を意識する機会に恵まれば」読書習慣がない大学生も読書習慣を形成し得ると考察されている (平山 2003 p.106)。また、加藤真紀は、大学における読書を小学校から高等学校までの読書とは異なる高次のものと位置づけ、大学生としての読書習慣は大学時代に新しく身につくとする (加藤 2019 p.3)。このことから、大学においても読書教育を継続して行うことにより、読書習慣が形成されていなかった大学生は読書習慣を身につける可能性があり、また、すでに読書習慣が形成されている大学生も、大学入学以前とはまた異なる新たな読書習慣を身につける可能性があると考えられる。

本稿では、大学生の読書習慣は大学入学以後も形成し得るという立場から、日本の大学における読書教育の事例検討を行い、大学生の読書習慣の形成に有効なアプローチを探る<sup>1)</sup>。各事例における読書の定義は一律ではないが、本稿では事例を網羅的に検討するため、読書を、文字を読むことや文章読解、書物による人間形成、さらに PISA や PIRLS (Progress in International Reading Literacy Study 国際教育到達度評価学会) が定義する Reading Literacy<sup>2)</sup> をも含む多様性に富んだ活動として広義に捉えた。

本稿の構成は、以下の通りである。まず、読書教育の手法を間接的なアプローチと直接的なアプローチ、二つに大きく分け、間接的な読書教育の事例として、大学図書館の読書推進活動と大学生生活協同組合 (以下大学生協と略) の読書推進活動を取り上げる。次に、直接的な読書教育の事例として、大学の教員による読書指導を取り上げる。最後に、読書習慣の形成に有効な読書教育のアプローチについて考察したい。

## 2. 大学図書館の読書推進活動

はじめに、間接的な読書教育として、大学図書館の読書推進活動を取り上げる。以下では、まず、大学生個人に働きかける多読推奨の取り組み、次に、読書環境を整備し大学生の読書に対する興味・関心を喚起する展示の取り組み、さらに、大学生同士がコミュニケーションを行う場を作り、読書推進を図る読書会形式の取り組みを検討する。

### 2.1 多読推奨の取り組み

読書量の増加を目的とした多読推奨の取り組みは、表彰などにより大学生一人ひとりの意欲を喚起することが多い。たとえば、神戸学院大学図書館では、大学4年間で100冊読み、感想を提出した大学生を表彰し、記念品を贈る「読書ラリー」という取り組みが実施されている(小畑・藤掛 2013)。同様の多読推奨の取り組みは、創価大学においても行われている(石山 2008)。創価大学の取り組みは「読書マラソン」という名称であり、後述する大学生協が行う同名称の取り組みを参考にしている。

また、長崎ウエスレヤン大学附属図書館では、大学生一人ひとりが大学図書館で読書する「朝活」という取り組みが実施されている(植松 2013)。そもそも、この取り組みが始まった理由は、小学校を中心に活発に行われている「朝読」と同様のことが大学図書館でできないかという相談を大学図書館が大学生から受けたためである(植松 前掲論文 p.34)。2012年度の「朝活」は、時間帯を8時15分から8時45分に設定して実施された<sup>3)</sup>。「朝活」のテキストには、単行本だけでなく新聞や絵本なども含まれる。「朝活」終了後、大学生はノートに反省点と目標到達度を記入し、大学生が記入したノートに図書館職員が毎回コメントを記入した。この「朝活」の取り組みには教員が主導して実施するものもある。

長崎ウエスレヤン大学附属図書館の「朝活」の取り組みは、表彰などの報酬を介した読書推進活動とは異なり、大学生の意欲に図書館職員や教員がコメントや支援によって応える読書推進活動である。日頃から大学生との信頼関係を構築した上で、図書館職員がきめ細かくフィードバックを行い、また教員も積極的に参加することにより、外的報酬に頼らず読書習慣が形成されている。

### 2.2 展示による興味・関心の喚起

前節の多読推奨の取り組みは、大学生個人へ働きかけるものだが、一方で、大学生が日頃から読書に興味・関心を抱くような環境を整備し、読書推進を行うという実践もある。その一例が、本を展示することによって、大学生と本を結びつける取り組みである。

神戸学院大学図書館では、新着図書のカバー展示、2ヶ月ごとのテーマ展示、各職員担当のミニ展示を行っている(小畑・藤掛 2013)。また、関西学院大学図書館では、教員の推薦本や新聞書評に掲載された本を展示している(伊藤 2012)。同様の取り組みは、石川県立大学図書・情報センターでも行われている。同大学では、テーマ別図書の展示を中心とした読書推進活動を10ヶ月にわたって実施した。一年生から三年生を対象に行ったアンケートでは、330の回収数があり(無効回収は0)、展示に対して80%が好印象を持ち、展示に添えられたPOPを50%以上が読んでいたことが示された。実施期間が短かったこともあり、貸出にまでつながったのは20%~30%だが、約40%が読書推進活動を通して読書への興味が高まったという(山岸・桑村・新村・竹中 2012)。

加えて、フェリス女学院大学附属図書館では、「読書運動プロジェクト」の一環として、年度ごとにテーマ、あるいは課題図書を設定し、テーマや課題図書に関連する本を展示している(藤森 2013 pp.23-24)。

この「読書運動プロジェクト」は、大学図書館が中心となり、プロジェクトに関係する教員や大学図書館を支援する学生の意見をまとめ、大学教務委員会の承認を得て行われていることから、全学的な取り組みだといえる。また、帝京大学メディアライブラリーセンターにおける、図書館の書架自体を展示スペースと捉える MONDO 書架の取り組みも、図書館が教員や在学生、外部団体と連携して行っていることから、全学的な展示の取り組みである（中島・辺見 2013 pp.3-5）。

さらに、一つの大学内にとどまらず、大学の外へと広がる展示の取り組みが、九州地区の国公立大学と高等専門学校が協同で行っている「Library Lovers' キャンペーン」である<sup>4)</sup>。廣田桂・大田海（2011）の報告によれば、実施内容は次の通りである。各参加館には、「図書館が森になる?!～育てよう、読書の木～」というコンセプトの下、「読書の木」が設置された。キャンペーンに参加した大学生は、「読書の葉っぱ」という葉の形をした応募用紙に推薦本のタイトルと感想を書いて応募し、その「読書の葉っぱ」は各図書館において「読書の木」に貼付された。応募数に比例して、「読書の木」に「読書の葉っぱ」が茂り、各大学図書館で「読書の木」が成長するという仕組みである。さらに、大学生が書いた感想や「読書の木」の写真は、Web 上で公開された。この「Library Lovers' キャンペーン」における「読書の木」を用いた展示の取り組みでは、展示によって読書に対する大学生の興味・関心を喚起するだけでなく、同時に、前述した大学生個人を対象とした読書推進と、後述する大学生同士がコミュニケーションを行う読書推進が同時進行している。このことから、「Library Lovers' キャンペーン」は、大学図書館における展示の可能性を示している。

そもそも、新刊案内やテーマ別などの展示は、大学図書館の日常業務である。したがって、展示を用いた読書推進の取り組みは、大学図書館において常に行われているといえよう。さらに、展示業務を、教員や大学生を巻き込む、また、地域全体にまで広げることができる取り組みとして捉え、展開していくことにより、読書に対する大学生の興味・関心をさらに喚起することが期待できる。このように、展示は、大学生の興味・関心を不断に喚起する点で、読書習慣形成を下支えする取り組みである。

### 2.3 読書会形式による読書推進

大学生間のコミュニケーションは、前節の展示の取り組みでも見られるが、読書会形式の読書推進の取り組みでは、参加者がお互いの顔を見合わせながらコミュニケーションが行われる点で展示の取り組みとは異なる。

フェリス女学院大学附属図書館の「読書運動プロジェクト」においては、3種類の読書会が実践された（藤森 2013 p.24）。第一に、課題図書を設定するもの、第二に、テーマを設定した上で、その関連本を読むもの、第三に、参加者各自が推薦本を持ち寄るものである。第一と第二の読書会は、教員主導で開催され、第三の読書会は大学生主導で行われた。同様の取り組みは、日本赤十字九州国際看護大学図書館でも実践されている（多川 2011）。「本を読んで話す会」と称するこの図書館が行う取り組みでは、テーマが設定され、さらにテーマの関連本の中から1冊が課題図書となる。開催は1ヶ月または2ヶ月に1回の頻度、時間は当初昼休み、第6回目からは夕方に設定されている。いずれの取り組みも、一人で読む楽しみとは全く異なる、共に読む楽しみが体験できることが特徴である。

上記の読書会形式による読書推進の事例では、課題図書が予め指定され、かつ、定期的に読書会が開催された。大学生は、共に読む楽しみによって、読書への興味・関心を高め、また、定期的に読書会へ参加することにより徐々に読書習慣を身につけることができる。このように、読書会という形式は読書習慣形成を促進する優れた手法である。ただし、読書習慣形成には、読書会という形式だけではなく、読書会で取り上げ

る本や読書会の内容が大学生の知的好奇心を満足させるものでなければならない。

以上本章では、大学図書館における読書推進活動の事例を検討した。検討の結果、大学図書館では、大学生に対する3種類のアプローチが行われていた。まず、多読推奨の取り組みでは、大学生一人ひとりにアプローチし、読書量の増加が図られていた。また、展示の取り組みでは、大学生の周囲の環境を整備するアプローチにより、読書に対する興味・関心を喚起することが行われていた。加えて、読書会形式の読書推進の取り組みでは、大学生同士がコミュニケーション活動の場を作るアプローチにより、共に読む楽しみや継続的な開催を通して読書習慣形成が図られていた。では、これらの3種類のアプローチは、大学図書館以外でも行われているだろうか。次章以降、大学生に対する3種類のアプローチに着目しつつ、事例検討を進める。

### 3. 大学生協の読書推進活動

前章では、間接的な読書教育の事例として、大学図書館における読書推進活動を取り上げた。本章では、大学図書館の活動と同様に間接的な読書教育として、大学生協の読書推進活動を取り上げる。以下では、同志社大学の大学生協が1970～80年代に実施した書評誌発行の活動、また、2000年代に始まり、現在まで実施されている多読推奨活動を取り上げる。

#### 3.1 同志社大学生協書評誌『邂逅（めぐりあい）』

『邂逅（めぐりあい）』（以下『邂逅』と略）は、1978年から1987年にかけて同志社大学生協が発行した書評誌である。名和（2011）は、『邂逅』の歴代の特集を検討し、高い理想を掲げ、学術的な読書を推奨したことから、『邂逅』の初期の取り組みを高く評価している。

名和によれば、1978年に書籍委員会が発足し、『邂逅』を発行することを決定した。『邂逅』は、3冊の本の紹介を行う「書評コーナー」、新刊書の案内を行う「ブックレビュー」、そして推薦本を掲載した「お気に入りの本」の3部から構成され、「お気に入りの本」のページが『邂逅』の中心であった。名和は、『邂逅』の編集が大学生協から大学生のサークルに移行したことにより、『邂逅』が書評誌から情報誌に変質したと分析する（名和 前掲論文 pp.226-227）。

『邂逅』の発行は、読書推進の目的を明確に打ち出した活動だが、果たしてどの程度読書推進に寄与したのかは明らかではない。ただし、名和によれば、全国大学生協の読書推進活動と同様に、『邂逅』の活動には次の4つの役割があった。第一に、大学生が自らの言葉で読書について語ることで、第二に、大学生が読書について他の大学生に伝えること、第三に、大学生が教員推薦の学術書について他の大学生に伝えること、第四に、大学生が大学生協店舗業務に参加することである（名和 前掲論文 p.235）。このことは、『邂逅』の活動に、大学生一人ひとりに働きかけるアプローチ、『邂逅』を大学生の身近に置き興味・関心を喚起するアプローチ、また、大学生や教員に編集に参加してもらうことにより、活発にコミュニケーションを行う場を作るアプローチが含まれていたことを示している。これらは、前章でも見られた3種類のアプローチである。『邂逅』発行の取り組みは、大学生が「読む」「書く」「聞く」「話す」ことによってアカデミック・スキルを培う良質の活動であったと考えられる。

だが、上述したように、『邂逅』の編集が学生サークルへと移行すると書評誌としての性格は失われていっ

た。全国大学生協の読書推進活動が1980年代の半ばをピークに衰退するのと歩調を合わせるように、『邂逅』の活動は後退していった(名和 前掲論文 p.237)<sup>5)</sup>。その後、大学生協の読書推進活動の勢いはしばらく衰えていたが、次節の「読書マラソン」の取り組みにより2000年代に再び活発になった。

### 3.2 読書マラソンとコメント大賞

「読書マラソン」とは、読んだ書籍に関するコメントカードを提出し、コメントカードが一定枚数に達すると書籍の割引券などが受け取れるという取り組みである。2002年に法政大学生協で行われたのが最初であり、以後今日に至るまで「大学4年間で本を100冊読もう!」の合言葉の下、各地の大学生協で行われている。2005年からは全国の大学からコメントを募集する「コメント大賞」の企画を始め、この企画も現在まで継続して行われている。

佐藤由紀・近森節子・酒井克彦(2007)は、「読書マラソン」について、日常的に読書を行う学生に対してだけでなく、読書を肯定的に捉えているが読書をしない大学生にも働きかけられる有効な取り組みであると考察している。また、立命館大学では、2004年から現在まで大学生同士が本について語り合う「ブックカフェ」という交流会が開催されている。この「ブックカフェ」は、当初「読書マラソン」に参加した大学生が立ち上げ、中心となって開催された。このことは、「読書マラソン」が異なる企画を生み出すような波及効果を持つ取り組みであることを示唆している。

また、「コメント大賞」を受賞したコメントは近年ウェブ上で公開されている。これら情報の共有により、大学生は他大学に所属する大学生の推薦した本を知り、そのコメントを読むことができる。他の大学生の推薦本やコメントは、読書に興味を持った大学生の意欲をさらに高めると考えられる。

以上本章では、大学生協による読書推進活動の事例を検討した。大学生協の取り組みには、前章で着目した3種類のアプローチ、大学生個人を対象とするアプローチ・大学生の環境を整備するアプローチ・大学生間でコミュニケーション活動の場を作るアプローチが全て含まれている。ただし、『邂逅』と「読書マラソン」、また「コメント大賞」を比較すると、大学生にアプローチする手法としては、「読書マラソン」と「コメント大賞」の方が大学生個人を対象にし、また外的報酬によって働きかける傾向が強い。『邂逅』の活動のように、大学生や教員が積極的に関与する仕組みを「読書マラソン」と「コメント大賞」に導入できれば、さらに有意義な読書推進活動となるだろう。

## 4. 大学の教員による読書指導

前章までは、間接的な読書教育として、大学図書館と大学生協の取り組みを取り上げてきた。本章では、もう一つの手法として直接的な読書教育を検討する。以下で取り上げるのは、いずれも大学の授業で教員が行う読書指導の事例である。まず、多読を目的とする読書指導、次に、読み方に焦点を当てた読書指導、さらに、読書会形式による読書指導の事例を検討する。

### 4.1 多読を目的とする読書指導

授業内で多読を目的とする読書指導を行う場合、教員が課題図書を設定することが多い。たとえば、守一雄と川島一夫が行った調査(1991)では、副読本として6冊の新書と文庫を指定している。授業を受講し

た大学生は、2週間に1冊のペースで副読本を読み、グループに分かれて2週間ごとに課題図書についてディスカッションを行い、各副読本についてレポートを提出したという（守・川島 前掲論文 p.107）。守と川島は授業実施の2年後に追跡調査を行い、大学生の読書量の増加を確認した。

守と川島が行った実践は、大学生一人ひとりが読書するように設計されている。また、課題図書や期間の設定やこの指導自体が、大学生が読書する環境を整備するアプローチだと考えられる。加えて、グループごとのディスカッションにより、大学生同士がコミュニケーションを行う場が作られている。守と川島の実践結果を踏まえると、教員が課題図書や読むペースを予め設定し、加えて、大学生同士が課題図書についてディスカッションを行うことにより、1年間という短い期間でも大学生の読書習慣は形成されるようである。

上記の事例は、読書指導が目的の授業だが、一方で副次的に大学生の読書意欲を高めた読書指導がある。それが、英語多読の実践である。深谷素子（2018）と大渡ドーガン・ジョン・パトリック、松本知子、ヴァンドゥーセン・ブレンダン、ローソン・トム（2020）の英語多読の実践は、結果的に大学生の読書意欲を高めることに成功している。深谷の実践は10ヶ月、大渡らの実践は1年という実施期間であり、読書習慣形成に加え、読書意欲も短期間で向上している<sup>6)</sup>。

一方、東城大輔・井岡瑞日・末次有加・深田直子・金重利典・高田昭夫（2022）が行った、大学生が読了した本について記録をつける読書カードの実践では、読書習慣の形成は見られなかったという（東城ほか前掲論文 p.72）。この結果に、読書カードの実践と一緒に実施された、絵本紹介ポスター、読書新聞作成の実践がどの程度関係しているのかは不明である。だが、東城らの実践と守・川島の実践で異なる点は、具体的な課題図書を指定しなかったことである。このことから、課題図書の有無が大学生の読書習慣形成に影響している可能性がある。確かに、前章の大学図書館における読書会でも、課題図書が設定されていた。次節では、さらに、読み方に焦点を当てた指導の事例について検討する。

#### 4.2 読み方に焦点を当てた読書指導

読み方に焦点を当てた読書指導は、前節で取り上げた読書量増加を目的とした読書指導よりもテキストの読解に注力しており、その点で大学図書館や大学生協の取り組みには見られなかった特徴がある。

たとえば、片山ふみ（2015）は、アニメーション<sup>7)</sup>を読書指導の手法として援用した授業実践を報告している。片山によるアニメーションの実践は、教員と学生がそれぞれ実施し、分割された文章を再構成し元の物語を考えるもの、チームに分かれて本に関するクイズを出し合うもの、物語の最後を考えるものなど11種類のアニメーションで構成された（片山 2015 p.147）。片山は、アニメーションによって大学生が読書や本に対する良いイメージを持つようになり、本の読み方に対しても印象の変化が見られたことから、アニメーションは大学生に対して効果的であると結論づけている。

アニメーションは、物語や詩を題材にしながらかイズ形式を積極的に取り入れる手法である。これまで取り上げた事例は通読を前提としており、アニメーションの手法による読書教育では、一般的な読書教育と読書概念が大きく異なっている。また、アニメーションの手法は、教員と大学生、大学生同士の間のコミュニケーションが必須の読書指導法である。これまで取り上げてきた事例の手法よりも、コミュニケーションに重点が置かれており、コミュニケーションを行っている間または後に、大学生一人ひとりが影響を受けることが想定されている。片山の実践報告によれば、アニメーションの手法は、大学生の読書に対する意識を変化させる効果があるが、読書習慣形成にも効果があるかについては、長期の追跡調査が必要だろう。

上記したアニメーションの実践では、授業のテーマに沿った本1冊を毎回取り上げているが<sup>8)</sup>、寺田正嗣が行ったフォーカス・リーディング（Focus Reading, 以下FRと略）の実践（2022）では、取り上げる本は

具体的に指定されていない。とはいえ、どの本でもよいわけでもない。寺田の FR 実践の概要は、以下の通りである。全国から自発的に集まった 36 名の大学生を対象に、寺田が 6 時間×3 日間の FR の講座を行った。講座で用いる FR は、5 つのスキルや手法、具体的には、スキミングを発展させた読書スキル<sup>9)</sup>、また、その読書スキルを用いシステマティックにテキストを読む、重ね読み<sup>10)</sup> や TPO (Time Place Occasion) 設定<sup>11)</sup> の手法、さらに、テキストの理解を確実にするための構造把握<sup>12)</sup> や理解明確化<sup>13)</sup> の手法から構成された。この実践に参加した大学生は、自分の興味に従って本を選んでよいが、読む本には一つのテーマを扱っており、見出しが本の内容を要約しているものという条件があった (寺田 前掲論文 p.145)。加えて、読む本の選書について参加者は適宜アドバイスを受けた。たとえば、最初は、自分が無理なく読むことができる内容・語彙の本、次は新書、最終日には、難易度が高いと感じる本などである。寺田は、FR を実践した結果、読書量の増加が見られたことから、読書習慣の形成に概ね成功したと結論づけている<sup>14)</sup>。

寺田の実践結果は、課題図書タイトルまで細かく指定する必要はないが、ゆるやかな条件を付け、各自の進捗に合わせて指導することの有効性を示唆している。寺田が実践した FR は、大学生に特定の読書方法を教授する手法として妥当であり、また、短期間ではあるが、きめ細かい指導を集中して行ったことが読書習慣形成に効果的だったと考えられる。寺田の実践は、大学生一人ひとりにアプローチするものであり、加えて、大学生に講座を受講してもらうことにより彼らの環境を変化させている。さらに、大学生同士のコミュニケーションはないが、教員と大学生の間で緊密なコミュニケーションが行われることから、着目してきた 3 種類のアプローチと類似した手法が用いられた実践であるといえよう<sup>15)</sup>。

#### 4.3 読書会形式による読書指導

梶谷恵子と片平朋世が実践した読書会方式の読書指導 (2014) は、多読目的の読書指導 (4.1) における課題図書の指定と、読み方に焦点を当てた読書指導 (4.2) におけるテキスト読解が共に含まれた実践である。

梶谷と片平が行った実践内容は、以下の通りである。まず、大学生は 3 人ずつのグループに分かれ、グループごとに予め教員が指定した 1 冊の長編小説を読んだ。グループがどの小説を読むかはくじ引きで決定された。大学生は本を読み終えた後、自主的に読書会を開き、最後に、読書会での意見交換を踏まえ、読んだ本に関して発表を行った。2 回目の実践を行う場合は、再度くじ引きを行い、グループ内での読書会の後に発表が行われた。さらに、実践報告から、発表の後に教員が課題図書の解説を行ったことが読み取れる (梶谷・片平 前掲論文 p.70)。

梶谷と片平は、大学生が上記の実践に参加し、自分の意見を持ちつつ他の仲間の意見を聞くことにより、課題図書の読みが深まったことから、読書会形式には効果があったと分析している (梶谷・片平 前掲論文 p.67)。梶谷と片平の実践は、大学生一人ひとりが読書を行うよう工夫されていた。また、教師による課題図書の設定や実践への参加により、大学生の環境は必然的に変化した。加えて、大学生だけで行う読書会は、大学生同士がコミュニケーションを行う場となり、さらに、授業内で教師と大学生のやり取りも行われていた。このことから、読書会形式による読書指導は、これまで着目してきた 3 種類のアプローチが全て含まれた実践だと位置づけられる。

梶谷と片平は、実践に参加した大学生は本を読み返す習慣が身についたと分析している (梶谷・片平 前掲論文 p.68, 71)。これは、読書会に参加することにより、大学生が従来とは異なる読書習慣を身につけたことを示している。加えて、参加した大学生には、自分が読んだ本について他の大学生に話す、他の研究室で行われているゼミに参加する、他の人が読んでいる本を読んでみようと思うなどの行動や意識の変容も見られた。

ただし、梶谷と片平の実践報告によれば、大学生は課題図書ならば読むが、自発的に読書するという段階には至らなかったとのことである（梶谷・片平 前掲論文 p.74）。したがって、読書会形式の読書指導が、読書を継続して行うという意味での読書習慣形成に効果的かについては、さらに実践研究を積み重ねていく必要がある。

以上本章では、大学の教員が行った読書指導を取り上げた。多読を目的とする読書指導では、各自が読む課題図書が指定され、読後のディスカッションを通して大学生同士がコミュニケーションを行うことにより、読書習慣が形成されていた。また、読み方に焦点を当てた読書指導では、大学生一人ひとりに対するきめ細かい指導によって読書習慣形成が成功していた。加えて、読書会形式の読書指導では、各自が読む課題図書の設定に加え、読書会と発表を組み合わせることで、部分的にはあるが読書習慣形成に成功していた。

## 5. おわりに

本稿では、日本の大学で実施された読書教育の事例を、間接的なアプローチと直接的なアプローチという手法の特徴で大きく二つに分け、さらに、読書教育を行う実施機関や実施者、すなわち大学図書館、大学生協、大学教員で事例を分けて検討し、大学生の読書習慣形成に有効なアプローチを探った。

まず、大学図書館においては、多読推奨の取り組み、展示の取り組み、また、読書会形式の読書推進が実施されていた。特に、長崎ウエスレヤン大学附属図書館の「朝活」の取り組み、「Library Lovers' キャンペーン」、フェリス女学院大学附属図書館の「読書運動プロジェクト」では、図書館職員や教員が読書推進活動に積極的に関与していた。このことから、大学生と教職員が協力して全学的に取り組むことが大学生の読書習慣形成に効果的だと考えられる。

次に、大学生協においては書評誌『邂逅』発行と多読推奨型の取り組み「読書マラソン」ならびに「コメント大賞」が実施されていた。「読書マラソン」と「コメント大賞」は、外的報酬を用いた即時性がある取り組みである。また、『邂逅』発行の活動は、大学生個人を対象とした取り組みにとどまらず、大学生同士、また教員とも交流する側面を併せ持つ活動であることから、長期的に継続していくことで読書習慣形成に効果があったと考えられる。

さらに、大学の授業における読書指導では、課題図書を指定した多読目的の実践や読み方に焦点を当てたテキストの読解、また課題図書に加え、話し合いや発表、教員による解説を組み込んだ読書会形式の読書指導が実施されていた。いずれの実践でも、大学生は集中的に読書に取り組み、また、実践への参加により、読書する環境に身を置き、かつ、大学生同士、あるいは教員とのコミュニケーションを行っていた。実践結果を踏まえれば、多読目的の読書指導、読み方に焦点を当てた読書指導、読書会形式の読書指導、いずれも読書習慣形成にある程度成功しているといえる。

本稿の事例検討の結果、取り上げた読書教育の事例において、3種類のアプローチ、すなわち大学生個人に働きかけるアプローチ、次に、大学生の環境を整備するアプローチ、さらに、大学生と教職員、また大学生同士がコミュニケーションを行う場を作るアプローチが用いられていた。大学の授業における読書指導の実践結果を踏まえると、これら3種類のアプローチを組み合わせ、実践することが読書習慣形成に最も有効であると考えられる。また、実践する際には、大学生が読書に集中できる時間を短期間でも作る必要であろう。

以上の考察より、筆者らは今後効果的な大学生の読書教育について3種類のアプローチ 1.働きかけ (Action and KR:Knowledge of Results), 2.環境整備 (infrastructure), 3.コミュニケーション活動 (communication) の観点から実践し検証を重ねたい。

## 注

- 1) 本稿で取り上げる事例の調査は、主にNII 学術情報ナビゲータ (CiNii), J-STAGE を用いて行った。
- 2) PISA では、Reading Literacy (読解リテラシー) を次のように定義している。「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、社会に参加するために、テキストを理解し、利用し、評価し、熟考し、これに取り組むこと。」(国立情報学研究所「OECD 生徒の学習到達度調査 2022 年調査パンフレット」[https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2022/01\\_point.pdf](https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2022/01_point.pdf) アクセス日 2023 年 5 月 27 日) また、PIRLS では、Reading Literacy を次のように定義している。「Reading literacy is the ability to understand and use those written language forms required by society and/or valued by the individual. Readers can construct meaning from texts in a variety of forms. They read to learn, to participate in communities of readers in school and everyday life, and for enjoyment. (読解力は社会で必要とされる、または個人によって評価される能力である。読者は様々な形式のテキストから意味を構成することができる。読者は学ぶため、学校や日常生活において読者のコミュニティに参加するため、そして楽しみのために読む。)」(PIRLS 2021 Assessment Frameworks 2019 p.6)
- 3) 実施後、曜日は水曜日に設定され、2012 年度の春休みには毎日実施された(植松 2013 p.34)。
- 4) キャンペーンが実施された記録は、ウェブページにあり、2020 年に最終更新されている。  
(<https://guides.lib.kyushu-u.ac.jp/librarylovers> アクセス日 2023 年 5 月 19 日)
- 5) 東大生協編集の『ほん』、京大生協編集の『綴葉』は現在も発行されている。
- 6) 太田真理の報告(2022)が取り上げているビブリオバトル授業も読書意欲を高める取り組みとして位置づけることができる。
- 7) アニマシオンとは、スペインのジャーナリスト、モンセラ・サルトが1970年代に子どもを対象として開発した読書指導法である。物語や詩を教材とし、間違いさがしなどのクイズやゲームを通して、読書習慣の形成、読解力、コミュニケーション能力の向上も目指す手法である。日本では、1997年にアニマシオンを紹介する書籍が発行され、注目されるようになった。(図書館情報学用語辞典 第5版 2020 p.4)
- 8) ただし、俳句を扱った「俳句でビンゴ!」という授業内容の際は、正岡子規、小林一茶、与謝蕪村などの複数の俳句が取り上げられた(片山 2015 p.148)。
- 9) 見出しと最初の一文を丁寧に読み、その後の文章は、理解度と読速度のバランスを取りながら読む。さらに、瞑想や周辺視、内声化の抑制のトレーニングを行い、速読ができるようにする(寺田 2022 pp.140-141)。
- 10) 下読み(Preview)→問いの設定(Question)→理解読み(Read)→振り返り(Summarize)の順番で本を読む。まず、下読みで章のタイトルからテーマを推測し、キーワードをメモする。次に、読む目的と本から学ぶ内容を問いの形で設定する。さらに、設定した問いの観点からテキストを精読する。最後に、読んだ内容をノートに書き出し整理した上で、再度テキストを読む(寺田 前掲論文 p.141)。
- 11) 寺田による呼称。精読する箇所とそれ以外で読むスピードをコントロールするため、読み始める前に、読書の目的、指導手順における位置づけ、読む時間とペースを確認する(寺田 前掲論文 p.142)。
- 12) 章のタイトルとキーワードから、章と章のつながり、さらに全体の構造を意識させること(寺田 前掲論文 p.141)。
- 13) 寺田は主観的な理解度をA~Gの7段階に分け、評価方法に慣れさせた上で参加者に記録させている。
- 14) ただし、寺田によれば、大学のテキスト等に対するFRの効果は限定的だという。
- 15) 牧恵子が開発した「あらし読み」は、寺田のように、題名、目次、序章などからテキストの構造を読みとる手法である。大学の授業ではなく、愛知教育大学附属図書館で実施された。(Current Awareness Portal 2020.1.22)

## 注（著者のアルファベット順）

- 藤森香織：読書の種を蒔くーフェリス女学院大学附属図書館における読書運動の取り組みー，大学図書館研究，97，pp.22-28，2013.
- 深谷素子：大学生の読書意欲を高める英語読書指導ー読書離れ対策としての英語多読授業の可能性を探るー，英文学研究 支部統合号，11 巻，pp.155-167，2018.
- 浜島幸司：読書習慣のない大学生の特性と傾向，The Basis 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要，9 号，pp.77-88，2019.
- 平山祐一郎：大学生の読書実態の分析ー女子大学生を対象としてー，読書科学，vol.47-No.3，pp.99-107，2003.
- 廣田桂・大田海：九州・沖縄の大学図書館が連携した「Library Lovers' キャンペーン 2011」実施報告，大学図書館研究，95，pp.75-82，2012.
- 石山光明：創価大学における読書運動の展開，大学図書館研究，84，pp.36-46，2008.
- 伊藤幸江：学生の利用のために今ここでできること 私立総合大学の選書の立場から-関西学院大学図書館の最近の取り組みを踏まえて-，大学図書館研究，94，pp.39-48，2012.
- 梶谷恵子・片平朋世：読みを深めるための学生指導ー読書会方式の効果についてー，ノートルダム清心女子大学紀要。人間生活学・児童学・食品衛生学編，38 巻-1 号，pp.62-75，2014.
- 片山ふみ：「読書へのアニメーション」援用の試みー大学生への効果に着目してー，聖徳大学研究紀要，第 26 号，pp.145-153，2015.
- 加藤真紀：専門・汎用コンピテンスの習得と読書習慣の形成に影響を与える大学教育や活動，Working Paper Series Mori Arinori Institute for Higher Education and Global Mobility，No.Wp 2019-01，(https://arinori.hit-u.ac.jp/wp-content/uploads/2019/10/WP 2019-01.pdf)，pp.1-24，2019.
- 国立国会図書館：愛知教育大学附属図書館，読んでみたいテーマの易しい新書を 1 冊選び普段話さない人と読み合う「あらし読み」をしませんか？ In 愛教大附属図書館」を開催，Current Awareness Portal <https://current.ndl.go.jp/car/40016>，2020.1.22.
- 守一雄・川島一夫：大学生への読書指導の効果ー副読本とディスカッションによる読書指導ー，読書科学，35 (3)，pp.104-110，1991.
- Mullis, Ina V. S. and Martin Michael O. ed. : PIRLS 2021 Assessment Frameworks, TIMSS & PIRLS International Study Center, 2019.
- 中嶋康・辺見順子：＜共読ライブラリー＞が創る「人」「本」「学び」の未来～帝京大学メディアライブラリーセンターにおける学修支援～，大学図書館研究，97，pp.1-12，2013.
- 名和又介：『邂逅（めぐりあい）』（同志社大学生協書評誌）と全国大学生協読書推進運動，社会科学，40 巻-4 号，pp.223-241，2011.
- 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会：図書館情報学用語辞典 第 5 版，p.4，丸善出版，2020.
- 小畑佳弘・藤掛久美子：神戸学院大学図書館における学生読書推進のための取り組みについて，97，pp.13-21，2013.
- 太田真理：コロナ禍における Zoom を使用したビブリオバトル授業の実践と考察，清泉女子大学人文科学研究紀要，第 43 号，pp.76-92，2022.
- 大渡ドーガン・ジョン・パトリック・松本知子・ヴァンドゥーセン・ブレンダン，ローソン・トム：日本の大学における初年次の英語多読活動についての省察，長崎国際大学論叢，第 20 巻，pp.1-7，2020.
- 佐藤由紀・近森節子・酒井克彦：大学生の読書実態と生協組織を通じた学生主体の読書推進運動の構築，大学行政研究，2，pp.61-73，2007
- 澤崎宏一：大学生の読書経験と文章理解力の関係，国際関係・比較文化研究，第 10 巻-第 2 号，pp.213-231，2012
- 多川綾子：本を読んで話す会-日本赤十字九州国際看護大学図書館における読書推進の取組み，看護と情報，vol.18，pp.68-70，2011.
- 寺田正嗣：フォーカス・リーディングを活用した読書指導が大学生の読書習慣にもたらす効果，読書科学，63-3・4，pp.139-152，2022.

- 東城大輔・井岡瑞日・末次有加・深田直子・金重利典・高田昭夫：保育士・教員養成校における初年次教育のあり方について－読書カードを活用した取り組みを中心に－，大阪総合保育大学児童保育論集，1号，pp.65-82，2022.
- 植松久子：図書館サポートサークルとの協働による小規模大学の読書推進活動－長崎ウエスレヤン大学のエンベディッド・ライブラリアン－，大学図書館研究，97，pp.29-38，2013.
- 山岸倫子・桑村佐和子・新村知子・竹中匠：大学における読書推進活動－学生によるテーマ別図書ディスプレイを中心に－，石川県立大学年報 生産・環境・食品 バイオテクノロジーを基礎として，2011，pp.44-49，2012.
- 吉田昭子：大学生の読書事情，生活協同組合研究，vol.508，pp.5-12，2018.

— Abstract —

Literature Review on Reading Education for University Students in Japan: Focusing on the Effect of Fostering Reading Habits

Tokuji HAYASHI  
Yumiko KATAGIRI

This paper explores what approaches are effective in reading education for Japanese university students to cultivate reading habits. We investigated the practices of reading education conducted by university libraries, university coops, and university teachers. This paper illustrates three types of effective approaches. First, encouraging university students to read. Second, changing the surrounding environment so that students accumulate their interests in reading. Third, creating a space where university students, teachers, and librarians can communicate one another. This paper indicates that combining the above three types of approaches in reading education is presumed to be the most effective way for Japanese university students to promote their reading habits.

